

## 「パーリ語貝葉写本」の謎

吉元 信行 (教授・仏教学)

本学図書館には、100年以上も前に東南アジア方面から将来された膨大な量のパーリ語貝葉写本（以下〈大谷貝葉〉）が存在する。この写本群は相当年数放置されたままで、その内容もわからなかったが、近年その目録が完成し、ようやくその全貌が明らかになった（大谷大学図書館編『大谷大学図書館貝葉写本目録』大谷大学1995年）。これらの写本群はその入手経路によっておおよそ次の2つのグループに分けることができる。

(A) クメール文字貝葉を主として、他に若干のビルマ文字、モン文字貝葉を含む64套の写本群。100数年前にタイ王室から寄贈されたと伝承されるもので、全て美しいインド更紗に包まれ、保存状態もよく、写本の文字も鮮明である。この写本は、1900年にタイ王室よりインドで発掘された仏舍利を日本仏教界に寄贈された折、そのときの正使：佛骨奉迎団の団長であった東本願寺の大谷光演新門に贈られたものであるとされる。それが本学図書館にどのようにしてもたらされたのか、記録がなく、また、写本も完全なものから、断簡としてかなり乱れた写本もあり、謎に包まれたままである。

(B) ランナー文字貝葉を主として少数のクメール文字貝葉を含む。これらは保存状態が悪く、無造作に保管されていたため、套数の把握も不可能である。タイのチェンマイあたりで書写されたものが、誰かの手によって本学にもたらされたと思われるが、将来の経過は謎のままである。内容はパーリ語とランナー語の混在した「ニッサヤ」形式のものが多いので、ランナー語ができない限り、この写本群の研究は至難である。



そこで、数年前より (A) の写本群について、その内容を調査したところ、まだ校訂出版のなされていない、あるいはクメール等の現地語のみによる出版のみで、学界に通用するローマナイズ出版のなされていない稀覯写本がかなり存在することが判明した。これら稀覯写本については、今後の研究が期待される。

それらの中でも、我々がまず注目したのは、「パンニャーサジャータカ：以下〈PJ〉と略す」（50ジャータカ、ただし、本学所蔵はそのうちの25ジャータカ）である。これは、かつて東南アジア独自に広く流布したが、それが正規のジャータカでないという理由で仏教教団から等閑に付され、現地ではほぼ散逸しかけている聖典であるからである。ミャンマー方面に伝承されたこのジャータカは、P.S. ジャイニ博士が発掘して、校訂出版しているが、タイ、ラオス、カンボジア方面に伝承されたものは、ジャイニ校訂のそれとは、ジャータカ名やその表現がずいぶん異なり、かなり早い時期に分かれて独自の伝承をしてきたと思われるのである。そのジャータカの数も必ずしも50ではなく、33、39、あるいは50以上を数える伝承もある。そのことを解明



するには、タイ王室の伝統の上にあると思われる〈大谷貝葉〉の研究が必須であると思われるからである。その後、日本学術振興会科学研究費、大谷大学真宗総合研究所指定研究、あるいは田辺和子博士による科学研究費などを通して、多くの研究協力者の協力を得て、〈大谷貝葉〉における〈PJ〉の諸異写本照合になる Transliteration を完成した（以上の研究経過については、拙稿「東南アジアに伝承された独自のジャータカ文学の発掘——大谷大学図書館所蔵パーリ語貝葉写本「パンニャーサジャータカ」の資料的意義——」頼富本宏博士還暦記念論文集『マンダラの諸相と文化 下 胎蔵界の巻』法蔵館・2005年、p.141-162参照）。この研究の過程において、筆者をはじめ協力者とバンコクや北タイの貝葉写本について調査を行ったが、その機会にタイ王室に最もゆかりの深い「ワット・ポー」寺院の経蔵に第39話までの貝葉写本があることが判明し、その写真を手に入れた。この写本と〈大谷貝葉〉のそれとを対照すると、それらは非常に近いことが判明し、〈大谷貝葉〉がタイ王室所伝の正統的な貝葉であることが傍証された。

ただ、同じタイ国内のチェンマイや北タイ方面に伝承された〈PJ〉、あるいはラオス、カンボジア方面のそれとはずいぶん異なっていることが指摘されており、ミャンマー以外での伝承はどのようになされたのか、依然としてその謎は解けない。

最後に、〈PJ〉ではないが、〈大谷貝葉〉には、正規のジャータカも若干存在する。その中でも南方上座仏教諸国では、547ある正規のジャータカのうち、最後の10ジャータカ（Dasa-jātaka）が最も重要視されていて、特に末尾の『ヴェッサンタラジャータカ』は「マハ・チャー（Mahā-jātaka）」と呼ばれ、各寺院で僧侶や信者の前で厳かに朗詠される行事がある。〈大谷貝葉〉には、このジャータカのみがクメール文字で書かれており、他の9ジャータカはビルマ文字写本でしかない。

ところが、一昨年、共同研究者からの情報で、大正大学図書館にクメール文字のジャータカ写本があるというニュースが入った。早速調査に行ったところ、なんと、10ジャータカの最初を1とすると、2、5、6、8、9番に当たるジャータカがクメール文字写本としてあり、本学にはある最後の『ヴェッサンタラジャータカ』がなかったのである。しかも大正大学所蔵の写本は、装丁、横・縦の大きさ、糸を通す穴の位置、文字の書き癖など、〈大谷貝葉と〉そっくりなのである。このことにより、大正大学所蔵のジャータカと〈大谷貝葉〉のそれはおそらく初めはセットであったもののいわゆる「泣き別れ」であるといえる。

そうすると、〈大谷貝葉〉将来の謎がいよいよ深くなる。あくまで仮説であるが、タイ王室が佛骨奉迎団に貝葉をプレゼントした。それを何人かの有力者が分け合った。そのうち団長であった大谷師がもっとも多く受け取り、大谷大学に寄贈した。大正大学の貝葉もジャータカ以外にいくつかあり、奉迎団の誰かが寄贈した。そうなると、まだ他に国内の大学か寺院にさらに「泣き別れ」の写本が埋もれている可能性が出てきた。このことが〈大谷貝葉〉に完本だけでなく、断簡の写本がかなりあることの原因になるかもしれない。まさに貝葉写本の謎はいよいよ深まるばかりである。